

学位論文審査の要旨

学位申請者	ERDENEE BINDERIYA 比較社会文化学専攻2019年度生			論文題目	対話的読み書き活動における相互支援のあり方と多言語使用の意義―社会文化理論とトランスランゲージングの視点から―
審査委員	主査:	西川 朋美	教授	インターネット公表	学位論文の全文公表の可否： 否
	副査:	李 址遠	講師		「否」の場合の理由
	副査:	西坂 祥平	准教授		☐ ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
	審査委員:	王 一瓊	講師		☐ イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
	審査委員:	池田 玲子	特命教授 (昭和女子大学)		☐ ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
学位名称	博 士	(人文科学)			☒ エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
(英語名)	(Ph. D. in Applied Linguistics)				☐ オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
					※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

学位論文審査・内容の要旨

本研究は、社会文化理論およびトランス・ランゲージングの枠組みに基づき、モンゴル人日本語学習者を対象に、作文授業におけるピア・レスポンス(PR)活動と読解授業における再話活動という二つの実践を分析することで、対話的・協働的な言語教育の実現のための理論的・実践的基盤を提示することを目的としたものである。近年、第二言語教育の分野では、認知主義的学習観やモロリガルの言語観に依拠した教育の限界が指摘され、学習者同士の相互支援や多言語資源の活用を重視するという視点の転換が起きつつあるが、本研究は、そのような流れをさらに推し進めるための基盤を提示するものとして、時宜にかなっていると言える。

研究1および研究2では、筆者がモンゴル人中級学習者2名を対象にした行ったPR活動を分析している。研究1では、PR活動における相互行為の変化を検討し、活動当初の一方的支援が、双方向的かつ協働的なものへと発展していく様子、ならびに、学習者間の関係性が信頼や共感を基盤に構築されていく過程を明らかにしている。そして、研究2では、二言語使用の実態を注目し、モンゴル語と日本語の柔軟な併用が意味交渉のやり取りを促進し、母語が内容理解や表現の改善を支える資源として機能することを論じている。

研究3および研究4では、筆者がモンゴルの大学で行った読解授業を対象とし、初中級学習者8名による再話活動を分析している。研究3では、母語を用いたペアと日本語のみを用いたペアを比較し、母語使用が学習者間のやり取りを活性化させ、理解促進やメタ認知的な働きかけに寄与することを明らかにしている。また、研究4では、支援の様子が一方的なものから双方向的なものへと変化していく過程を描き出すことで、母語使用が学習を支える手段として機能し、活動全体の構築を支える役割を果たすことを明らかにしている。

総合的考察では、学習者間の相互支援と柔軟な母語使用が、密接に関連しあいながら、学習者の理解の深まりや表現の再構築を支えることが改めて論じられ、教育実践における教師の役割や教師研修の重要性など、対話的・協働的な学びの実現に向けた具体的な提言がなされている。

教育実践そのものを対象とした質的アプローチの研究が比較的限られている中、本研究は、学習者間の相互支援のあり方や母語使用の実態を仔細に検討し、対話的・協働的な学びを促進するための実践的な提言を行った点で大きな意義がある。また、モンゴル人学習者を対象とすることで、伝統的な教育観が未だ根強く存在するアジア諸国の日本語教育現場に対して、実践研究の必要性とその具体的な提案を含む新たな提言を行った点にも重要な意義を見出すことができる。

審査は6月25日と8月22日に二度行われた。第一次審査では、先行研究に対する本研究の位置づけの不明瞭さ、具体的なデータの記述における誤り、本研究の実践的意義に関する記述の薄さなどが指摘され、申請者は改稿を行った。各審査委員がこれを審査した結果、全員から最終審査会に進んでよいことが示され、8月22日に公開発表会が開催された。公開発表会でのプレゼンテーションはわかりやすく、聴衆からの質疑に対する回答も丁寧かつ確だった。その後開催された最終試験では、各審査委員からの所見が述べられた後、博士(人文科学)(PhD in Applied Linguistics)を授与するにふさわしいことが全会一致で認められた。

公開発表会・最終試験結果の要旨

公開発表会、最終試験は、8月10日までに作成された改稿を各審査委員が個別に審査した結果、全員から公開発表会・最終審査会に進んでよいことが示され、結果、8月22日に開催された。公開発表会において、申請者は自身の博士論文の内容をわかりやすく説明した。また、質疑応答でも会場からの質問に対し、丁寧かつ確に回答していた。その後開催された最終試験では、各審査委員からの所見が述べられた後、博士(人文科学)(PhD in Applied Linguistics)を授与するにふさわしいことが全会一致で認められた。